

# 検査の質の担保のための人材育成 ～卒前教育～

◎佐藤 謙一<sup>1)</sup>、永沢 善三<sup>1)</sup>

国際医療福祉大学 福岡保健医療学部<sup>1)</sup>

遺伝子関連・染色体検査を担当する技師は臨床検査業務においては少数である。一方で、病原核酸検査を主として簡易法や自動化装置が進歩し、また近年のゲノム医療の推進にともないこの領域に携わる技師は増えつつある。昨今の SARS-CoV-2 感染拡大により遺伝子関連・染色体検査に対応できる技師の確保が社会的にも求められた。

2021年3月末に文科省・厚労省より、「臨床検査技師学校養成所指定規則の一部を改正する省令」が出され、検査技師養成課程において「遺伝子関連・染色体検査学」が独立した必修科目として設置されるに至った。それまでは、各施設の裁量でカリキュラム構成されてきたが、医療に資する臨床検査として、精度管理を含めた核酸解析・染色体解析の理論と技術を学ぶ体制が確立した。演者の所属施設は2013年4月に開科した。当時より、社会・医療における遺伝子関連・染色体検査への要望・関心の高まりを踏まえて、関連する教育カリキュラムを構成してきた。内容として「遺伝学」「遺伝子・染色体検査学」「遺伝子検査学実習」（以上3科目は必須科目）、「分子病態検査学」（選択科目）の4科目である。特徴の一つとして「遺伝学」を必修科目として設置している。ゲノム医療が推進されるなか、生命情報の継承と個体間の多様性に関する学問分野である「遺伝学」の理解は重要である。遺伝学的な知識の習得を基礎として、必要な核酸解析技術およびその精度管理・質保証について学ぶプログラムとしている。「遺伝子・染色体検査学実習」では、学生が自身のアルコール代謝に関わる ADH1B および ALDH2 遺伝子バリエーションを解析する。実習をとおして、生殖細胞系列遺伝子検査の意味、被験者へのインフォームド・コンセント、解析結果を含む個人情報の取扱い、検査の精度管理・質保証などについて学習する構成である。

本講演では、遺伝子関連・染色体検査の人材育成について、卒前教育に携わっている立場から、教育カリキュラムを紹介しつつ、現状と課題について議論したい。